

コロナ(COVID-19)とパブリックスペース「第三の場」・「まちの居場所」・創造性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): パブリックスペース, パノプティコン, 定住自立圏, 創造性, バレバレ, 述語的包摂, 衛生のインフラ キーワード (En): 作成者: 岡野, 浩 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20210416-009

Title	コロナ(COVID-19)とパブリックスペース「第三の場」・「ま ちの居場所」・創造性
Author	岡野, 浩
Citation	都市と社会. 5 巻, p.22-29.
Issue Date	2021-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	
DOI	10.24544/ocu.20210416-009

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

〔特集論文〕

コロナ（COVID-19）とパブリックスペース 「第三の場」・「まちの居場所」・創造性

岡野 浩（大阪市立大学 都市研究プラザ 教授）

〔キーワード〕 パブリックスペース／パノプティコン／定住自立圏／創造性／バレバレ／
述語的包摂／衛生のインフラ

コロナウィルスは世界中の人々の生活を大きく変えた。発生から1年を経過した現在、世界の都市部においてロックダウンや緊急事態宣言による閉店措置などが繰り返されている。ここでは、「衛生のインフラ」としての「パブリックスペース」と「創造性」との関係性を「第三の場」や「まちの居場所」の観点から検討するとともに、インドネシアの「バレバレ」やまちライブラリー、国会図書館（関西館）など、パブリックスペースとしての図書館や「場」などを創造的にする方策について取り上げた。また、共有施設の生かす方法をはじめ、監視目的のスペース（ベンサムの一望監視装置^{パノプティコン}）とすることなく、創造性やレジリエンスの芽を作り出すものとしてオープンスペースを捉えながら復元力^{レジリエンス}との関係性を示す考え方を示した。その一つが述語的包摂である。

I. はじめに

コロナウィルスは世界中の人々の生活を直撃している。とりわけ都市部において感染者数が多く、2021年に入って、イギリスは三度目のロックダウンが実施され、日本も7府県において二回目の緊急事態宣言がなされるなど、感染の拡大が止まらない。

本稿では、UNESCOで世界遺産や創造都市ネットワークなど多くの文化関連事業を長年にわたり推進されたバンダリン氏¹⁾を中心として編まれた『アフターコロナの都市の未来：国際調査』（WFCC19）、およびダボス会議を主催してきたシュワブ氏ほかによる『グレート・リセット』（Schwab & Malleret 2020）で提起された課題²⁾との関わりの中から「パブリックスペース」や「創造性」を選び出し、「第三の場」や「まちの居場所」の観点から一望監視装置^{パノプティコン}としてではなく衛生のインフラ^{スペース}＝創造的な空間として見直す方策についても考えたい。

II. 『国際調査』（WFCC19）第一部の結論

『国際調査』において、第一に強調されているこ

とは、「グローバリゼーションの危機である」という認識である。すなわち、グローバル都市はグローバル市場とグローバル価値連鎖の指揮統制システムから成り立っていたが、もはや当てはまらず、グローバリゼーションの性質は急速に変化しており、接続性とモビリティが現在対立しているともいう。そして、都市の反応と集団行動の状況が重要となる。とりわけ、今となつては「行き過ぎた」グローバル価値連鎖による矛盾と不均衡に基づく問題に起因するという。「この矛盾と不均衡は、都市間の新自由主義的市場競争のよつてもたらされた『かたち』の変化によるものである」とし、この『かたち』が都市の回復力^{レジリエンス}と都市間の協力の結果として生じる可能性があるという。さらに、「都市は、持続可能性、安全性、医療の関係性をめぐるの迅速な行動を起こすためのプランを練り上げねばならない」とし、このことは「市場競争の経済的要請よりも緊急かつ重要である」と主張する³⁾。都市と都市がバナンスを中心とした戦略的アプローチに取り組むためには10~20年というより長い期間が必要となる

とする。

こうした分析から、持続可能な開発アプローチで新型コロナウイルスから回復するため、新しい都市のグローバルポリシーを特徴付ける要素を特定することが重要であるとし、第一部（25都市の研究者提供に基づく調査）の結論として以下の三点を指摘する。

- ①「国内市場と市民の新たなニーズに対する、より大きな志向」＝新しいテクノロジーの需要と供給のマッチングと戦略的統合計画の普及の促進が必須である。
- ②「ローカルレベルで統合された都市の戦略計画政策」＝政策の正当性として「エンドユーザーとイノベーションの受益者の関与」が必須となる。
- ③「一元的に統合されたボトムアップアプローチに基づくガバナンスモデル」＝ローカルな需要を集約し、経済・社会・環境のバランスの観点が必須となる。

いずれの点も重要なものであるが、ある意味では「内向き」な結論に導いていると思われるかもしれない⁴⁾。最近日本政府が出した「2030年代半ばにガソリン車販売を廃止」は、ガソリンスタンドもハイブリッド車も無くそうという「破壊」を志向する。「これから関連する業界との折衝を行う」としながら、自動車業界との調整は行われていないことは元旦の日経紙に出た見聞広告「私たちは、動く。#クルマを走らせる 550 万人」（自動車工業に関する5団体の連名）から窺われる。曰く「ガソリンスタンドで働くスタッフも。物流を担う運送会社のドライバーも。この550万人の思いがひとつになったら、どれほどの力になるだろう」。この政策の立案に際してコロナ禍で疲弊している様々な「現場」に足を運び、多くの人の話を「直に聞く姿勢」が重要であろう。上述の『国際調査』の結論はこのことを強調しているのである。

他方、『グレート・リセット』においては、社会基盤や経済、地政学的、環境、テクノロジーなどの「マクロリセット」、デジタル化、レジリエンスの高いサプライチェーン、政府と企業との関係性、（企業）行動の変容などの「ミクロリセット」、そして、人間らしさの見直しや心身の健康、創造性や時間、消費、大自然との関係性の優先順位を変えるという「個人

のリセット」の「三つのリセット」を提起する。

III. 都市のガバナンスと第三の場・まちの居場所

1. 都市のガバナンスと定住自立圏

わが国でのコロナ対策の最大の課題は、司令塔の役割が分散されていることである。国と都道府県、市町村の連携が不十分である。企業の場合、組織の責任をオーバーラップさせるやり方は日本の経営の一つとして長らく行われてきたやり方である。病院にしろ、図書館にしろ、設立母体の違い（国立・県立・市立、あるいは省庁別の縦割り）によって、連携がなされないという点が問題であるとともに、その中の一つが間違いを起こした場合でも連動しないことによって被害が少なくなる。

ここで、中心市と近隣市町村が相互に役割分担し、連携・協力することにより、圏域全体として必要な生活機能等を確保する仕組み、すなわち、地域連携を推進し、地方圏における定住の受け皿を形成しようとするものである「定住自立圏」が興味深い⁵⁾。とりわけ、三重県の伊賀市による「圏域証」の発行がなされた。緊急事態宣言により県をまたいだ移動が自粛されるなか、京都府笠置町、京都府南山城村、奈良県山添村と「伊賀・山城南・東大和定住自立圏」を形成している伊賀市において、県境を跨ぎ、生活圏を共有する一つの地域であるため、県境を越える移動は日常生活の維持に必須となっていることから、生活圏が同じ共同体の一員であることを示す自動車用の「圏域証」を作成し、希望者は各自でダウンロードできるようにした。危機の時代において、国や都道府県との連携における機能不全をカバーできる仕組みが求められている。

2. 「第三の場」としての図書館

地域コミュニティの衰退、人と人との繋がり希薄化、社会的排除と格差の拡大、公共空間の減少、民主主義の弱体化などが進む中で、人種、民族、階級、ジェンダー、年齢、職業、心身の障害など様々な枠組みや差異を超えて、あらゆる人々が集うリアルな開かれた公共的、民主的な空間として果たしうる図書館の社会的、政治的、文化的役割や機能が、図書館研究や実践現場はもちろんのこと、行政や一

般市民においても高く再評価されつつある。

図書館という場所や空間についての本格的、先進的な研究である「場としての図書館」研究への評価も同様に高まりと広がりを見せている。当該研究が登場しておよそ20年が経とうとしている今、これまでの業績を振り返り、一定の評価と展望を示す研究史の登場が俟たれている。枠組みについては、「公共圏」や「社会関係資本」、「公共領域」、そしてここで取り上げる「第三の場」などがある。これは、オルデンバーグが『サードプレイス』(1989)の中で提唱したものであり、「第一の場」である家庭と「第二の場」である職場、そして自由に出入りでき、中立・平等な居心地良い空間において、気楽な会話を楽しめる公共の場としての必要性を指摘した⁶⁾

Oldenburg (1989)は、「第三の場」の特徴として以下の8つを指摘する。①個人が思いのまま出入りでき、くつろげることができ、心地よく感じる。②「一般住民」がアクセス可能で、会員資格や排除の基準を設定しない。③会話が主な活動である。④アクセスしやすく、協動的である(知り合いが見つかる確信できる場)。⑤常連や客仲間がいる(新参加者と信頼を育きながら、その場でくつろぎ、陽気な雰囲気をつくる)。⑥建物が目立たない(気取らず、日常にとけ込ませる)。⑦陽気な、遊び場的な雰囲気を持続している。⑧家を離れた時のもう一つの家である。

「第三の場」としての公立図書館についての研究に共通する主張は、図書館は地域の多様な人々や情報との楽しく気軽な出会いと交流の場(「第三の場」)を提供することによって、住民の日常生活を幸福で豊かなものにし、地域コミュニティの結束と活性化を促進し、地域社会や住民のための「公共」の場や社会関係資本を創出するという、重要な社会的機能と役割とを有しているということである。また、様々な課題が山積する現代社会において、その機能をより効果的に発揮し、図書館の価値と魅力とをさらに高めるべきだということである。

それは、新自由主義のもとでの図書館民営化への危機感が高まる中、「第三の場」がカフェやショッピングモールなどの営利的で娯楽的な場に最も良く該当するとの思考が広がってきたことである。オル

デンバーグは、「第三の場」のような「リアルな場」(real places)では、人は独自の人格をもつ唯一の個人として存在し相互に出会うことができるが、画一的な消費資本主義的な「非場所」では、人は名もなき単なる「顧客」、「消費者」として孤立し疎外されていると論じている。

3. まちの居場所

日本建築学会の「まちの居場所」研究ワーキンググループはその評価基準として次の12点を挙げている⁷⁾。1.「ついでに」利用できるところに作る。2. まちにある「資源」を活かして作る。3. 立ち寄りたくなる仕掛けを作る。4. 機能を混ぜ合わせる。5. 家具で「居やすさ」を設える。6. 「居やすい」雰囲気を作る。7. ルールで縛らない (No rule)。8. たえず関わる者のニーズを汲み、改変する。9. 人々が関わる「余白」を作る。10. 新しいつながりを生み出す。11. そこにしか果たせない役割を担う。12. まちのこれからを指し示す(日本建築学会 2019)。この12の基準を用いて20のスポットの様態を横断的に評価する。その中でも、「資源」、「雰囲気」、「No rule」、「ニーズ」、「余白」、「つながり」という名詞、および「混ぜ合わせる」、「改変する」という動詞を用いて、居場所の良さについての判断基準を提起している(岡野 2017)⁸⁾。ここで「ついでに」という副詞を筆頭に持ってきている点が重要であろう。

ここでの意味は「地域コミュニティの中心に位置取りることによって「ついでに」利用でき、特段利用目的がなくても滞在したいということにある。また「ルールで縛らない」(No rule)ということは難しいようにみえるかもしれない。この点が「管理者は不要」という点に繋がるのであろうが、他方ではこれまで公園などで見られてきた「占拠」の状況をいかに避けるかが重要な論点になるであろう。

IV. コロナ禍におけるオープンスペース

1. 日本の公共図書館の開館状況と国立国会図書館・関西館

図書館などの被災・救援情報サイト「saveMLAK」はこのほど、第4回「COVID-19の影響による図書館の動向調査」の結果を公開した⁹⁾。それによると、

第一次の緊急事態宣言の際に休館していた図書館は 1553 館（92%）で、4 月 23 日の第 3 回調査から 4%増加した。基礎自治体で 1508 館（92%）、都道府県で 45 館（96%）休館している。ゴールデンウィーク明けに開館するとしている図書館は 245 館あった。鳥取、岩手、徳島、島根、鹿児島、長崎では 40%以上の図書館が 5 月 8 日までの開館を予定していた。

ここで注目すべきは国立国会図書館・関西館（京都府精華町）である。東京本館では 3 月 5 日より国会議員からのレファレンスサービス以外は基本的に閉じられたが、関西館では緊急事態宣言が出された 4 月 11 日より解除される 6 月 11 日まで閉館されていたものの、期間以外は抗菌対策を施した上で開館しつづけていた。利用者の観点からすれば、関西館が開けられていることは非常に良いことであった。国立・都道府県立・市町村立など設立母体の違いと感染数の多様性によってこうしたことが起こりうることに留意すべきである。

2. まちライブラリー

「まちライブラリーもりのみやキューズモール」は、大阪市中央区森ノ宮の商業施設である「もりのみやキューズモール BASE」内にある。設置会社は東急不動産であり、一般社団法人まちライブラリーが運営委託を受けて運営している¹⁰⁾。コロナにより昨年の緊急事態宣言の折には閉鎖されたが（2020 年 4 月 8 日～5 月 20 日）、その後再開され、来館者は前年同月比で 80%強まで戻っている。入館は誰でも可能で、カフェも併設されており、本の貸出には、貸出登録会員になる必要があるが、これは初回のみ 500 円のカード実費を支払う。会員数は、昨年 12 月で前年同月に対して 35%程度増加しており、貸出数も 2 割程度伸びているという（累計 6500 名を越える）。イベントは、2019 年 3 月から 2020 年 2 月までの一年間で 360 件程度実施していたが、2020 年 3 月からは 7 月までは 10 件以下になり、8 月以降は 30 件程度実施されている。「まちライブラリー」の発案者である磯井純充氏は筆者の問い合わせに以下のように述べる。「コロナ禍で利用者は、本を求めていることは強く感じます。また小規模なも

のであれば感染対策もしやすいので可能な限り継続をしていくつもりです。東急不動産からも商業施設の中で他のイベントが全て中止となっているなかで、まちライブラリー的な小規模イベントを連続してやるやり方がもっとも有効であるといわれています」。

3. インドシナの共用縁台（バレバレ）とヴァレッタ（マルタ）のバルコニー、日本との関わり

インドネシアのマカッサル沿岸に位置するラエラエ島などにおいて、古くから住民に利用され続けている「バレバレ」(Bale Bale)という縁台的な「しつらえ」がある¹¹⁾。そこでは、ただ一人で座っているだけだったり、集まって話をしたり、昼寝をしたり、調理器具を持ち込んで食事をするなど、使われ方は様々である。外部の人でも自由に使用できる。家庭内では「ここは私のスペースだ」というように奥さんや子供も持っている場合もある。

コロナ禍での状況について現地の研究者¹²⁾によれば、「南スラウェシの農村地域で共同交流スペースとして機能する『バレバレ』については、距離を保ち、家を出て交流することを減らす都市コミュニティとは対照的に、パンデミック以来、その機能はあまり変わっていません。農村地域において、コロナウィルスは交流の場としての『バレバレ』の使用にはあまり影響していないです。梅雨の時期においても、家の外に置かれ、木陰になっており、屋根がないため、感染することはありません。研究のため、雨季になる前に何度か漁場を訪れたが、現地コミュニティはいつものように『バレバレ』で活動や交流を続けていました」という。インドネシアやマレーと鹿児島^{おおさき}（大隅）や京田辺^{おおさき}（大住）との海を介する古代の文化的関係については「隼人」研究として様々な研究領域から分析されている(大林 1975)。これらを結びつけるものは「竹」とその物語（記憶）である。縁台や縁側とバレバレとの関わりなどは今後の課題としたい（前田 2020）。

バレバレとともにインドネシアの家屋に配置されているのがレゴレゴである。レゴレゴはバルコニーであり、バレバレと連結され二階部分に配されることが多いものであるが、アラブ文化やイタリア、

そしてイギリスなど多様な文化が埋め込まれたマルタの建築様式の中で、バルコニーの独自性は女性にとって重要な意味を持つものでもある。EU 文化首都 2018 (ヴァレッタ、マルタ) の国際会議において、出窓のバルコニーのデザインや色を中心に景観を統一しようとする政府と、近隣とは異なるデザインを望む住民 (特に女性が各家庭でのそのデザインを決定する権限を有する) との意見対立がみられたことが注目される (岡野 2016)。

多様な価値観や伝統のせめぎ合いのなかで、異質な文化が共存する社会空間をいかに構築するかとともに、それぞれの文化を引き継ぎ、また、都市と都市 (地域) とをコミュニケーションし共存する理論的枠組みが求められている。また、マイノリティとまちのかかわりを文化による「包摂」の是非の観点から見ることも重要であろう。多様なステークホルダーによる立案段階での参画手法を示し、政策の課題や問題点を学際的に掘り起こす準備作業が求められる。

V. おわりに

ド・セルトー (1987) は、モノが幾千もの過去の実践を生来させ、実践を通して使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行っている「モノ」に焦点を当てるべきだと述べている (岡野 2019)。さまざまな集団や個人が、これから「監視」の網のなかに囚われ続けながらも、他方でこここに散らばっており、戦術的で、ブリコラージュ¹³⁾に長けた「創造性」が隠れた型 (隠密形態) をとっているか、この在り様を掘り起こすことが必要であるとする (岡野 2020)。

Schwab & Malleret (2020, pp.234) において、ニュートンやシェークスピアの例を挙げ、私たちの社会や歴史の至る所にあふれている「創造性」が回復力の源となることは歴史がすでに証明しているとす。^{レジリエンス} 一望監視装置として緊急事態宣言下での状況を映し出す鏡として無批判にパブリックス

ースが用いられることは避けるべきである。また、「キーワーカー」あるいは「エッセンシャルワーカー」とされる医療関係者などへの待遇の改善はもちろん、彼らが働く場所、さらには各外国人の文化に合致したオープンスペースをいかに創造的にするかなど、多くの課題がある。他稿を期したい。

【注】

- 1) UNESCO の前事務局長補で元世界遺産センター長であったフランチェスコ・バンドリン (元ユネスコ副事務局長)、エンリコ・チチオッティ (ピアチェンツァカトリック大学)、マルコ・クレマスキ (パリ政治学院)、パオロ・ペルーリ (東ピエモンテ大学) が中心になって、『国際調査』(Bandarin, *et al.* 2020) が公表された。とりわけ、バンドリン氏は、筆者がマネジングエディターであった国際学術ジャーナル *City, Culture & Society* (Elsevier) のチーフエディターをお引き受けいただき、現在でも世界の文化行政に大きな貢献を果たされている。
- 2) 「パンデミックとは複雑で順応性のある一つのシステムであり、いろいろな要素や情報から成り立っている。その動きは、企業、経済政策、政府の介入、医療政策あるいは国のガバナンスといった変数で変わってくる。… (中略) … 新たな大流行の発生をすぐに検知できるグローバルな監視ネットワーク、新たなウィルス株を素早く分析し、効果的な治療方法を開発する世界各地の研究施設、地域社会が準備したり、スムーズに対応したりするための巨大 IT インフラ、決定が下されたら無駄な手続きを省いて実行に移せる健全で組織的な行政組織などである。ここでのポイントは、各項目はパンデミックに対応する際には重要ではあるものの、他の活動と連動することがなければ十分にその機能を発揮できないということである」(Schwab & Malleret 2020, p.33-34)。日本政府や都道府県に求められるのは「健全で組織的な」という点であろう。
- 3) ここで必要となる基準は「持続可能性」であり、2015 年に国連加盟国によって採択された SDGs (持続可能な開発目標) の 11 番 (都市を包括的、安全、回復力、持続可能にすること、およびその具体的な目標) は、『国際調査』

で言及された新しい傾向へのつながりを意味するという。

- 4) 「地政学的な不安定さをもたらす決定的要因は、欧米からアジアへ進みつつある「リ・バランス」(re-balancing)である。その過程でストレスが生まれ、世界が無秩序化していく」(Schwab & Malleret 2020, p.104)。
- 5) 圏域に求められる役割として、①生活機能の強化 (休日夜間診療所の運営、病児・病後児保育の実施、消費生活法律相談の実施、地場産業の育成等)、②結びつきやネットワークの強化 (デマンドバスの運行、滞在型・体験型観光・グリーンツーリズムの推進、生活道路の整備等)、③圏域マネジメント能力の強化 (合同研修の実施や職員の人事交流、外部専門家の招聘) などがあげられる (総務省 HP)。
- 6) オルデンバーグの「第三の場」は、アメリカの郊外再開発都市を批判し、伝統的コミュニティ再興を説くジェイン・ジェイコブズを始めとするアメリカ都市研究の流れを汲むものであり、また、ジェイコブズの批判的継承者と目される都市社会学者シャロン・ズーキン氏の理論に負っている。
- 7) これにさかのぼる日本建築学会 (2010) では、居場所の特性として、①訪れやすい、②多様な過ごし方ができる、③多機能である、④多様な人の多様な活動に触れられる、⑤自分らしく居られる、⑥社会的関係が作り出される、⑦参加できる場がある、⑧キーパーソンがいる、⑨柔軟である、⑩地域との接点ができる、⑪物語が蓄積される、などが挙げられていた。
- 8) これが「述語的包摂」である (岡野 2009, 2017)。とりわけ、動詞に名詞や副詞を合体させ (抱合する: incorporate) ことによって新たな動詞を作る「抱合語」が注目できる。
- 9) これは5月5日午前9時から同6日午後4時まで、全国の公共図書館・公民館図書室など1692館 (前回の調査から66館増) のウェブサイトの公開情報を目視で集約したものである。
- 10) 面積は240㎡、蔵書数は18000冊程度、年間の利用者は14万人である。
- 11) 多くの住民は漁業を営み、主な宗教はイスラム教であり、島の施設としてはモスクをはじめ、共同井戸、診療所、集会所、役所の出張所、墓地などがある。アダット (慣習法) とバレバレとの関係については Lukman (2015) を参照。
- 12) Associate Professor. Idawarni Asmal (Architecture

Department, Engineering Faculty, Hassanudin University, Indonesia) からの私信 (2021年1月10日付)。

I like to express an acknowledgement.

- 13) 寄せ集めて自分で作ること。「繕う」「ごまかす」を意味するフランス語の動詞 "bricoler" に由来する。

【参考文献】

- 大林太良 (1975) 『隼人：日本古代文化の探究』社会思想社。
- 岡野 浩 (2009) 「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」 (佐々木雅幸ほか編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、65-84頁)
- 岡野 浩 (2016) 「EU文化首都の一齣：バルコニー・昭和天皇・文化編集」『欧州文化首都国際シンポジウム *Cities as Community Spaces* 報告書』EU ジャパンフェスト、東京。
- 岡野 浩 (2017) 「復元力・文化編集・世界遺産：創造的な述語で編集・包摂する」(阿部昌樹ほか編『包摂都市のレジリエンス：理念モデルと実践モデルの構築』水曜社、31-43頁)
- 岡野 浩 (2020) 「都市生態と文化編集：アクターとしての「メタセコイア」と「てりむくり」」『都市と社会』第4号。
- ド・セルトー, M. (1987) 『日常の実践のポイエティック』(山田登世子訳、国文社)。
- 日本建築学会 (2010) 『まちの居場所：まちの居場所をみつける・つくる』東洋書店。
- 日本建築学会 (2019) 『まちの居場所：ささえる・まもる・そだてる・つなぐ』鹿島出版会。
- 前田速夫 (2020) 『海人族の古代史』河出書房新社。
- 俞 世洋ほか (2021) 「中国製造業とコロナウィルス：化粧品・自動車製造企業および部品サプライヤーを中心に」『都市と社会』第5号。
- Bandarin, F. *et al.* (2020) *Which Future for Cities after COVID-19: An International Survey*, Feem Foundation. 『アフターコロナの都市の未来：国際調査』 (https://www.feem.it/m/publications_pages/963-rpt-future-after-covid1.pdf)
- Honey-Rose, J. *et al.* (2020) "The Impact of COVID-19

on Public Space: An Early Review of the Emerging Questions – Design, Perceptions and Inequities,” *Cities and Health*.

- Lukman, M.Y. (2015) *A Study on the Gathering Styles of Indonesian Culture: Case Study of Tudang Sipulung and Bale-bale in Makassar Islands*, Doctoral Dissertation, Osaka University.
- Oldenburg, R. (1989) *The Great Good Place: Café, Coffee Shops, Bookstore, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Da Capo Press. (『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』(忠平美幸訳) みすず書房、2013年。)
- Schwab, K. & T. Malleret (2020) *COVID-19: The Great Reset*, *World Economic Forum*. 『グレート・リセット：ダボス会議で語られるアフターコロナの世界』(藤田正美ほか訳) 日経ナショナルジオグラフィック社。
- 総務省HP https://www.soumu.go.jp/main_content/000448718.pdf

